

## かごしま農36景



### 資源・水

夜、中学の娘が食卓で勉強したのか、地理の教科書が置き忘れられている。朝飯を食いながらページをめくる。口絵に世界各国の食事や農業や生活の様子を紹介。内容も「世界から見た日本」「世界の結びつき」など国際関係に力点が置かれている。今から三、四十年昔、私たちの教科書がどうであったか、とんと記憶にないが、「持てる国」と「持たざる国」というのがあったように思う。日本は、国土が狭く、石炭や石油も乏しい「持たざる国」であり、国際関係もこの立場から、言い換えると貿易経済の視点から教わった気がする。確かに、わが国は原油のほとんどを輸入する資源小国である。だが、果たしてそうとばかり言えるのか。

「日本人は、安全と水は無料で手に入ると思い込んでいる。」この言葉は、イザヤ・ペンダサン著、『日本人とユダヤ人』の中に出てくる。「水の一滴は血の一滴に匹敵する」と言われる乾燥帯気候にあって、創世紀以来流浪の民として絶えず差別・迫害を受けたユダヤ人と、私たち日本人とでは、安全や水に対する考えが違って当然。ユダヤ人は、安全のためには城壁を造り、最高級ホテルに住むなどするという。また、地下水道と下水道を準備しなければ生命を守り、伝染病を防げないと。これらの重荷を半永久的に子々孫々まで負い続けると。一方、安全や水を確保するために金を払おうとする日本人はいない、それほど安全と水は、常に絶対に豊富だったと指摘。

言うまでもないが、我が国には、アジア・モンスーンにより年間千八百ミリメートルの雨が降る。これは世界平均の二倍以上、熱帯に匹敵。これに夏の暑さが加わって我が国の稲作は可能になった。そして、大地にまるで血管のように張り巡らされた水利システムが、稠密な人口を養い得る豊饒な国土を形成したという。『日本の米』の著者、富山和子さんの言葉を借りると、この水利システムはピラミッドや万里の長城の比ではなく、「大地の生産力の育成」ともいべき環境資源である。

二〇三〇年には世界人口は三十六億人増えるという。その反面、耕地面積は減り続けるというから、食糧問題は深刻さを増す。それだけに、今後水源涵養や土壌の塩分防止の機能など、地球環境にやさしく、食糧生産を持続可能とする水利システムは重要な役割を担うことになろう。しかも、取り尽くすことのない資源として。

(1995年8月)

◇「かごしま農36景 / 発行:鹿児島県農業農村整備情報センター」より

文:門松経久

写真:米元秀和「実りを待つ」第4回かごしまフォト農美展